

グラマ —アゼルバイジャンの装飾 美術—

「グラマ」とは(Qurama)、アゼルバイジャンのユニークな工芸種類、織物切れ端の芸術である。この用語は、文字通り「結合された」物を意味し、個別の布の小切れで縫われた一体の作品である。トルコでは「クルフ・ヤマ」（40の化合

物）と、中央アジアでは「クラマ」と呼ばれる。

(1)

グラマ製品は、アゼルバイジャン人の生活において広まったのがアゼルバイジャンでの織物業の発展に関係する。グラマを作るために絹、地元生産の更紗、ベルベット、ブ

ロケード及びウール生地が主に用いられた。周知の通り、アゼルバイジャン人の古い伝統である、家族のお祝い時に際してドレスの生地のために切れはしをあげるという習慣が20世紀の半ばまで残ったままだった。衣類縫製やその他の繊維製





ボフチャ用グラマの種類
アゼルバイジャン国立歴史博物館の民族学フォンドのコレクション

品からの残り屑は破棄されなかった。このように、布の切れはしや屑が十分に溜まったら、それらを使って、生活で利用可能で、明るい色を備えた小さな繊維製品が縫われていた。「タタール人の女性（アゼルバイジャン人女性）は働くのが好きで、様々の手芸で有能だ」と19世紀のロシア研究者らがアゼルバイジャン人女性について記していた。（2）グラマの模様の製品は、アゼルバイジャン全体に普及されていた。布の小切れの多種多様な接続図は世代から世代へと開発してき、また、グラマ製品の独自のデザイン自体は、当然のことながらも、その選択及び使用が女性の名人の風味、そして、物質的な富に依存していたらしい。一見、グラマの簡単なバリエーションの幾何学的な形は合体し、調和のとれたカラースキーム

をする。組織で異なるグラマ製品は、その使用特殊性に応える。アゼルバイジャン国立歴史博物館の民族学フォンドのコレクション（以下、民族学館）において19世紀～20世紀初期関連のグラマの100以上の見本が保管されている。アゼルバイジャンでは、グラマの様に、「ホフチャ」という(Boxça)衣類を積み兼ねるための布、マント、多様なカーテン、布団用カバー、その他に日常生活で使用される製品を作られていた。グラマの組成形態の多様性をもってによって次のグループが分けられる。1) 長方形の切れ端や幅の異なる布のリボンで縫われた；2) パターンのある布リボンのみ組成；3) 色々なバリエーションで接続された三角形の切れ端。最も簡単な組み合わせは、通用10センチ～20

センチ幅のシルクリボンによって囲まれた真ん中の四角形である。ボフチャや四角形のカーテンも同じく縫われていたらしい。カーテンは家の内装の最も実質的で目立つ要素だったので、そのデザインには特別に注意が払われていた。カーテンは、「タフチャ」という小さな壁がん、「ジャマハタン」という大きな壁がん、「ゲルデック・ペルデシ」という花嫁の場所等の部屋の装飾として用いられていた。「リャフ」という壁の棚の装飾の為には違う形のカーテンがあり、それは縁飾りのように色のついた布のリボンを三方で縫われ、下から三角形が切り取られていた。たまに、中央の四角形には上から三角形を覆う長方形の布が縫い付けられていた。カーテンの端、また、三角形の上に縫い付けられたその折り曲げ部分には、通



い付けられた色のついた三角等の長いリボンである。色彩豊かな三角等で装飾された表面側に布の細いリボンが追加されるペルデ・バシュはまた違う種類である。あるペルデ・バシュには三角の角に太陽の象徴が飾られ、また星間で女性の様式化された画像が見える。

(民族学館の第3078号アイテムを参照)

グラマ製品のもっと複雑なデザインは(民族学館台6669号アイテムを参照)、262×234センチの壁用の装飾で、幾何学的な形の様々な細かい組み合わせに基づく。このデザインは、糸くずの出ないカーペット及びキリムの絨毯の模様を連想させる。絹・ベルベット・ゼルハルの小切れの幾何学的な形は、45×45センチの中央にある単色のメダリオンを中心に複雑で鮮やかなパターンを成す。正方形メダリオンのひし



常、黄金フリンジや組紐が縫い付けられていた。アゼルバイジャンの村では未だに「ミュテッケ」という(Mütəkkə)ローラー型の枕が見られる。それらも普通グラマで飾られており、中央には細長い長方形、縁は異なる色の布リボンで出来ていた。ボフチャは同じく、布小切れの組み合わせ、及び、その角に正方形の布に加わっていた。縁に濃い色のリボンは、布の表面を更紗の裏地と接ぐと同時に、細い縁取りとしての役割を果たしていた。ワイド・リボンは、多彩の布小切れの細線に置き換えられ、それで複雑な組み合わせの円形模様が成る。

上記のグラマ製品は、布の切れ端が縫い合わせたもので、布団カバーは布の縫いリボンは凸状表面

をするように一層ずつ重ねられる。(民族学館：第1972号アイテムを参照)長いリボンを成す布の切れ端は、下のリボンの縫い目を閉じるように二回に折り、縫いつけられる。絹のストリップは重なっていき、X形をなす同じ色の小さな三角で飾られた正方形のメダリオンをする。シルクリボンの色合いは別の長方形のメダリオンの同じ側にリズムカルに交互し、同様に繰り返される。このように、鮮やかな色のリボン閉じ込みは、菱形の新しいメダリオンをし、先の小三角は縁取りとなる。そうして、多色の四角形のように見える明暗の菱形のリズムができ上がる。

グラマの最も特殊的なパターンは、「ペルデ・バシュ」という裏側から縫

形要素ありのX型のリボンは、上記に述べてきた様に、単色三角形の組み合わせの4つの正方形を形成するメダリオンと代替している。中心の隅は、4つの同色のメダリオンによって飾られている。各セットは、正方形円形メダリオンを成し、絨毯のパターンを想わせる黄黒のリボンによって分割されている。長方形のメダリオンでは、色を除き在らずや模様対称性が観察される。どうやら、希望色の布小切れ不足なのか、違う人が正方形メダリオンを組み合わせたのか、色は非対称となる。しかし、一般的モザイクにおける小規模な対称形の不一致はこの製品の組成優秀性を損なうものではない。壁用の装飾は、金属リングで壁にかけられるか、「ジャマハタン」という大きな壁がんに覆うためのカーテンとして用いられる。ボフチャは、二色の正方形を構成する色とりどりの三角形らを成す縁のおかげでエレガントな外観をもつ。2つの三角形メダリオンの組み合わせは、たまに、4色の三角形によって複雑化される。各メダリオンで三角形要素の



色と一緒に渡る。このようなデザインは、沢山のカーテンや布団用カバーのためのグラマで見られる。中央の正方形を中心に積み重ねられた2行の三角形を形成するメダリオンが幅広く普及されている。通常は、正方形が2色のひし形を成す三角形のベースに接ぐ。三角形の2行目は、正方形のメダリオンの全体構成を完成させる。こうして、グラマは布団カバーや壁用の装飾やマント等々でよく使われるものとなる。

あるマントでは正方形メダリオンが三角形から成る4つの四角形を構成させる。このメダリオンの特徴は、正方形を成す三角形らの単色性にあり、それは各々の正方形をより明確にみせる（民族学館台4717号アイテムを参照）。このマントは、長方形をし、2横の側面にゼルバフタという金箔の紐に飾られている幅20センチのリボンに縫われ、縦は金箔フリンジに縫い付けられている。このマントは、明らかに結婚式用のトレイ、いわゆる「ホ



毛布用グラマの種類

ンチャ」をカバーするために使用されるようである。アゼルバイジャンでは、寝具の質及び量によって花嫁の家族の繁栄性を判断することができ、それは嫁入り道具の主要な一部であった。「ヨルガン・ウシュテュ」というキルティングはよく飾られていたものである。それは、普段、一体の絹の生地で作られていたが、博物館の展示物の存在を考えたら、それは昔布小切れのキルトもあったと言えよう。

ペルデ・バシユは壁がんの装飾であり、カーテンに似て、家の内装の面白い部分であった。19世紀の半ばごろのペルデ・バシユはグラマの組み合わせのように作られ、それは長さ0,5~2メートル・幅0,2~0,3メートルからなるリボンの多色の三角形が互いに上に置かれるものである。また、この種類のグラマ、ペルデ・バシユは下部に縫い付けられた多色の三角形のある長いリボンが特徴的である。ペルデ・バシユの他の種類は、多色の三角

形で飾られている上部にはもう一つの太いリボンが追加される形である。ペルデ・バシユの輪郭は絹組紐や「ガラギョズ」・「ザンジレ」という金箔組み紐で飾られている。ペルデ・バシユは金箔絹糸やフリンジ・タッセルが特別にエレガンスを与えていた。タッセルは、同一または明るいビーズとの接続点と三角形とひもの先端に取り付けられた金属製のペンダントで飾られています。タッセルは明るいビーズと金属製のペンダントで飾られ、ひもや三角形の先端には接続点と取り付けられていた。20世紀の初めは、単色でなめらかなペルデ・バシユに対称的に様々な形や大きさの金属プラーク、パールボタン、レース等が縫い付けられていた。珍しいながらも、グラマはまだ民族衣装の一部でも使用される。このように、民族学館においてはグラマのやり方で作られた4つの「パタヴァ」(敷物)がある。その二つは先端に色で一致させる小さな三角形が縫い付けられているキャラコ・リボンである。残りの二つは金の赤・緑のリボンで作ら



リヤフ壁がん用グラマの種類
アゼルバイジャン国立歴史博物館の民族学フォンドのコレクション

れている。緑色の布は波線のように赤いリボンの上に付けられている。また、グラマは象徴的な意味を持っていた。したがって、ぼろのコート、「ヒルギヤ」が（直訳アラビア語では区切りと意味）は神秘的な経路を歩む禁欲主義者が着ていたらしい（3）。中世では、スーフイー時代にて、人々は布切れで作られた服を着、贈り物の服は幾つかの部分に切り、再び一つの着物に縫い合わせたものである。（4）おそらく、色とりどりの切り端の縫い合わせがまるでお守りの役割を果たしていたかもしれない。例をあげてみると、絨毯を観察したら、4つの異なる色に分けられている部分のひし形のパターンが見られ、それは邪眼保護だったらしい。グラマは、民俗工芸の品種の一つとして、その質量と功利主義価値によっ

て大事な役割を果たし、そのデザインの構造にて幾何学的な形の対称性が重要化され、幾何学的な形は単純かつ複雑な構造図面で成っていた。グラマのカラフルな伝統的な解決策は、その調和に求められている暗いと光色の組み合わせの効果である。グラマのカラフルな伝統的なデザインは、その調和に求められている暗いと光色の組み合わせの効果を与える。グラマの明るいパレットは家庭の快適製品と、家の内部にお祝いの感覚を作らせていた。グラマの芸術的なマナーの多様性と独創性を観察したら、この工芸がアゼルバイジャンで独立して存在していたことを言えよう。

参考文献

1. キスリャコフ及 A. K. ピサルチック 編集 『カラテギン及びダルバズのタジク人たち』、1970、ドゥシャンベ、

頁203

2. 『コーカサスを越えてロシアの持ち物の見直し』、第2巻、カザフ、頁228

3. イスラム事典、1991、モスクワ、頁278

4. フェルハング・アシャルト・ハフィズ及びアフメド・アリレジヤイ・ブハライ、1375、テヘラン、頁200

イラスト一覧：

1) グラマ種類

1. カーテン用

2. リヤフ壁がん用

3. ボフチャ用

2) グラマの種類

1-3 ボフチャ用

4. ホンチャ及びマント用

5. マント用

3-1 1. グラマの見本
国立歴史博物館の民族学フォンドのコレクション ◆